

「里のほほえみ」の栽培のポイント

～べと病に罹りやすいので適期防除を～



べと病(葉)



べと病(子実) (出典: 栃木県農業環境指導センター)



葉焼病 (出典: 栃木県農業環境指導センター)

基本技術(湿害対策、土づくり等)の適期励行で、単収・品質の向上を!

ほ場の選定・排水対策

ほ場の選定	<ul style="list-style-type: none"> ●排水が良好で、燐酸や加里、腐植に富んだ土壌のほ場 ●生育期間中の地下水位が40～50cmのほ場
排水対策	<ul style="list-style-type: none"> ●ほ場周囲(排水が悪い場合は、ほ場内にも)に明きよを設置する。 ●地下浸透性が著しく劣るほ場では、プラソイラ等により心土破碎を実施する。 ●畝立て同時播種栽培を行うと発芽初期の湿害を回避できる。

土づくり・施肥・播種

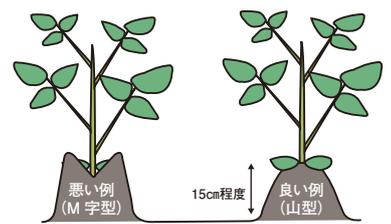
土づくり	●良質堆肥や有機物の継続的施用、作土深の確保、適切な土づくり肥料の施用等を総合的に行う。
適正施肥	<ul style="list-style-type: none"> ●基肥窒素：2 kg/10a ●リン酸及び加里：8 kg/10a ●地力の低いほ場は「大豆専用ひとふりくん」を基肥に施用するか、開花期～開花後10日頃に尿素を追肥する。「ちりめんじわ粒」軽減にもつながる。
播種	<ul style="list-style-type: none"> ●必ず種子消毒を実施(紫斑病等) ●播種適期：6月15日～7月5日 ●播種量：4.5～6.0kg/10a ●栽植本数：11,000～17,000本/10a

雑草防除

播種直後	<ul style="list-style-type: none"> ●土壌処理剤を散布する。 ●中耕作業で処理し、処理しきれない場合は生育期散布を行うようにする。
生育期	●雑草の種類に応じて剤を選択する。

中耕・培土

- 1回目の中耕
播種後20日頃(複葉1～2枚程度)に行う。
- 2回目の中耕培土
1回目の7～10日後(複葉4～5枚程度)で、初生葉節が隠れる程度まで行い、培土した土が茎まで覆う「山型」とする。



培土における株元への土寄せ方法 (農業技術体系作物編6, 技39)

病虫害防除

べと病	<ul style="list-style-type: none"> ●多発したほ場では連作しない。密植や早播きはしない。 ●開花10日前～子実肥大期に薬剤防除する。(①開花前に発生した場合は、茎葉に散布する。②開花後に発生した場合は、開花後の早い時期に散布する。なお、発生が拡大する場合は、開花40日後までに追加防除する。)
紫斑病	<ul style="list-style-type: none"> ●前年多発したほ場では秋耕する。 ●必ず種子消毒を行う。 ●防除効果の高いQol剤(アミスター20フロアブル)を基軸とした防除体系とする。ただし、アミスター20フロアブルの成分「アゾキシストロビン」は耐性菌が出現しやすいので隔年使用とする。
葉焼病及び斑点細菌病	<ul style="list-style-type: none"> ●発病の多いほ場は連作を避け、田畑輪換を行う。 ●病原菌は風雨により運ばれて伝染するため、台風等の風雨後に薬剤を散布する。
主な害虫	●ハスモンヨトウ、カメムシ類、マメシクイガ、フタスジヒメハムシ

※主な防除農薬及び病害虫は、裏面を参照ください。

栃木県・農協・全農とちぎ・栃木県食糧集荷協同組合・(公社)栃木県米麦改良協会

